



鈍感主人公は気づかぬうちに全てを失う

ダメー  
ジレ  
ベル  
「A」

俺の名前は——ここでは名も無い転校生ということにしておこう。

転校してきてまず最初の仕事は部活のチェックだった。

『レベルの高い女がいる』『ライバルが少ない』という条件で洗い出し見つけたのがこのガ○ブラバトル部。

部員三人でイザと言う時の補欠がいなかったことも幸いして

俺に狙われているとも知らず女部長は大喜びでこちらを迎え入れた。

メガネと赤毛の男子部員二名はバトルでは凄腕だそうだが

女方面では俺の相手になりそうもなかった。

赤毛の方には現役モデルの姉とお嬢様学校の知り合いまでいて

俺の「部活」は忙しいものになった——

「君！  
ガ○ラブトル部へようこそ！」

「今日は  
君の歓迎会だから  
うーんと楽しんでね！」



『ホ○ノ・フ○ナ』ガ○ブラバトル部部长。  
日常的にスポーツブラにスパッツという無防備な格好を人目に晒しており  
無自覚なエロさを振りまいている元氣系。

俺の入部歓迎会の後、

越して来たばかりの俺が夜道では不案内だろうとついでだったので、

そのまま家に誘い込み込み歓迎会の続きなどと言って

口当たりのいい「特製ドリンク」を飲ませ

フワフワとさせ一気に持って行った。



ドリンクの効果で何もわかっていない状態の間に

『ムラムラして私から襲いかかった』という言質も取り撮影もした。

後日、嘘泣きで被害者を装いつつ動画を見せ反応を伺うと彼女は

『自分とはんでもないことをしてしまったので償いをしたい』と言った。

こうして俺は『信頼していた先輩に一方的に性行為を強要され

歪んだ性癖に目覚めてしまった哀れな少年』という立場と

その性癖からくる行為を無抵抗で受け止める女を手に入れた――

「弟をよろしくね」

「君 入部おめでとう」



『カ○キ・ミ○イ』カ○キの姉だ。  
人気のファッションモデルというだけあって  
その辺の女とはレベルが違う。

フ○ナを落とした後、深刻な雰囲気を装い

『セ○イ君のことで相談がある』と持ちかけ家に連れ込み

思考力が鈍る程度に調整した例のドリンクを飲ませた上で

撮影者が俺とわからないように撮ったフ○ナのハメ撮りを見せ

『セ○イ君からこの動画を買ったがどうしていいかわからない  
とても動揺して何も手につかない』と訴えた。



思考力が鈍っているせいであやしく俺の言葉を信じ込み  
ひどくショックを受けているミ○イに対して

カ○キの保護者としての罪悪感を煽るような言葉を並べ立て

『弟のせいで精神的ショックを受けたお友達を  
できる限りのことをして慰める』

という意思表示をさせ行為に及び証拠の動画も押さえた。

何でも言うことを聞く現役ファッションモデルなんて

最高じゃないか——



「セイン君と仲良くしてあげてね」

「セイン君と」

「あなたが新入社員？」

『サ○キ・カ○ルコ』名門お嬢様学校に通っている女だ。

カ○キに惚れているらしく何かと口実を作りやってきてヤツに猛然とアビールしていたが完全に通じていない様子だったのでその想いが空回りしてるところを上手く利用した。

まずは何の説明もなく例のフ○ナのハメ撮りを見せて混乱させ放置ししばらくしてから詳しい話をしたいと言って家に連れ込んだ。



カ○ルコの場合は前の二人と違い

完全に部外者なので一気に落とす材料がなく

ひたすら傷心を慰めるフリをするという正攻法を使い押し切った。

(もちろん「ドリンク」で接待して軽く思考力を鈍らせはしたがw)

『カ○キへの思いは抱きつつも心の隙間を埋めるため他の男に抱かれる』  
という後ろめたい想いが快楽の源になっているのか  
いつしかカ○ルコは積極的に俺に体を開く女になった――



某日、部活終了後の部室にて――

「ね ねえ… 本当は…する…の？」

「……………」



「あ あのね！ ここは私にとって大切な場所です！」

「……………」

「ごめん… 着替えてくるね！」

「やっぱりF○ナ先輩はその格好が「一番ですよな」

「そ  
そ……」

「自分の性的な魅力にも気付かずに

エロい体のライン丸出しにして街中うろついでる

天然痴女の露出ファッションですからw」

「そんなつもり……」

「でももう気付いたんでしょ？」

俺とこういうことするようになってからは

プレイ以外で着なくなりましたもんね？」

ドキ……

ドキ……

ドキ……

「そ  
それは……」

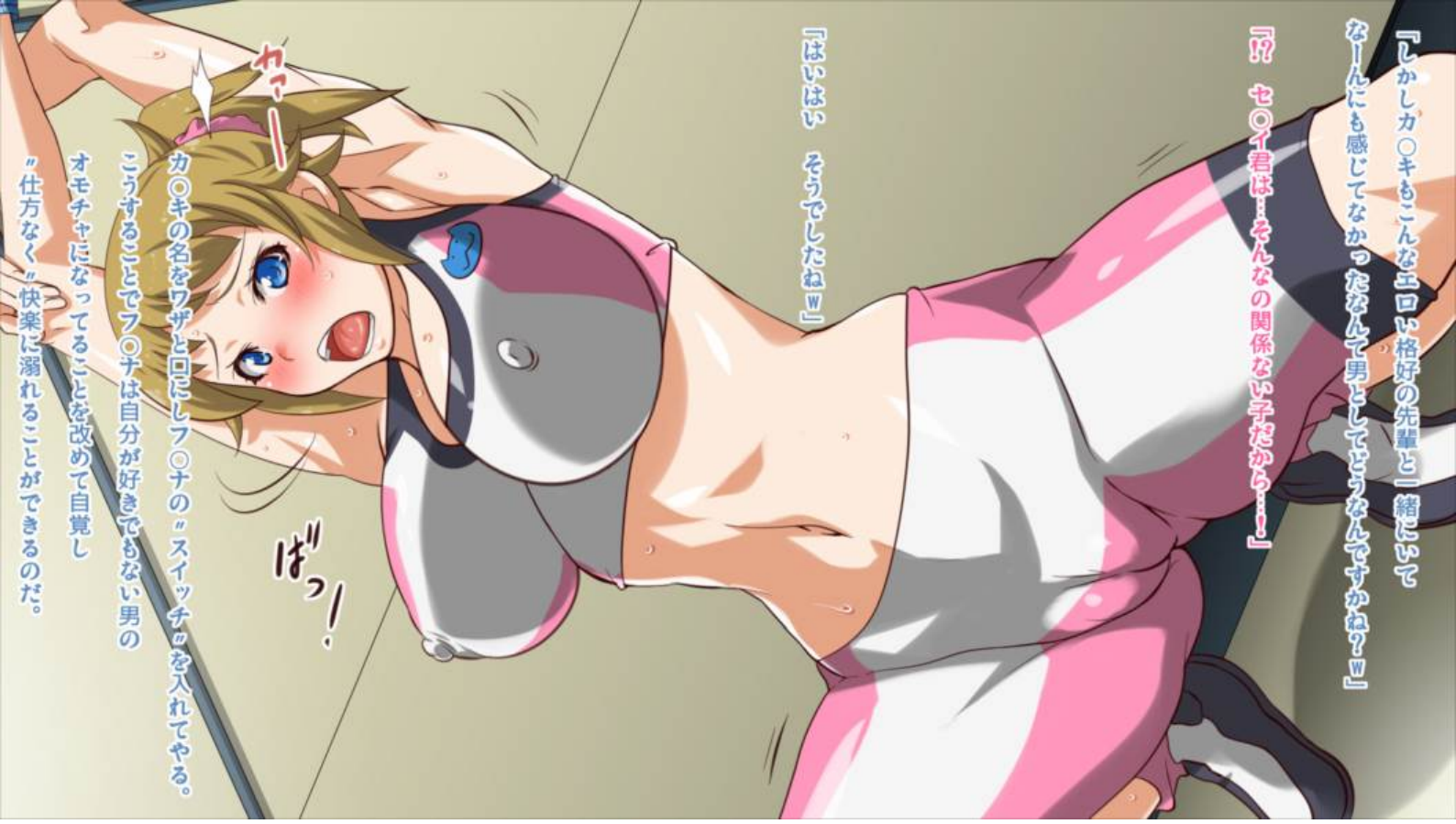
「しかしカ○キもこんなエロい格好の先輩と一緒について  
なんにも感じてなかったなんて男としてどうなんですかね？w」

「!? セ○イ君は…そんなの関係ない子だから…!」

「はいはい そうでしたねw」

はっ!

「カ○キの名をワザと口にシフ○ナの「スイッチ」を入れてやる。  
こうすることでフ○ナは自分が好きでもない男の  
オモチャになってることを改めて自覚し  
「仕方なく」快樂に溺れることができるのだ。」





「僕なんかほら その格好の先輩見てるだけで  
こんなになっちゃうのだw」

「んっ……」

わいっ!

「きっと僕だけじゃないですよ？」

今まで先輩がその格好で出かけた先々で

何人もの男がこんな風になっちゃって

頭の中で先輩のこと犯してたと思いますよw」

わいっ  
わいっ



「いい匂いでしょ？先輩とする時はちゃんど

前の日から洗わないようにして準備してますからねw

はい それではまず挨拶のキスからお願いしますw」

「こんばんはオチ○ホさん

今日もフ○ナを…気持ち良く

させてください…ん…っ…」

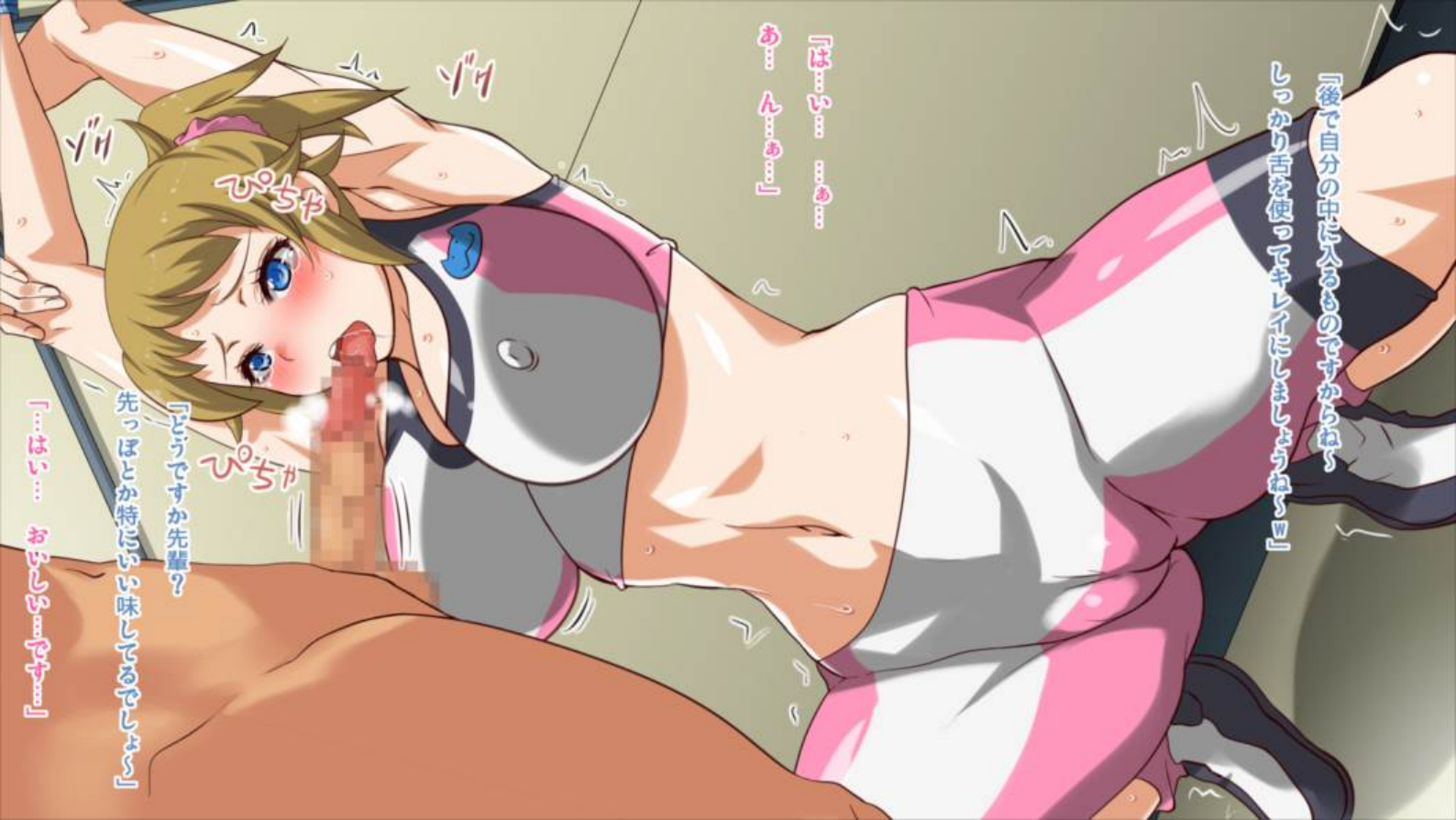
ちゅっ

ちゅっ

もわ…

「はい こんばんはホ○ノ先輩

今日もお世話になりますw」



「後で自分の中に入るものですからね」  
「しっかり舌を使ってくれんじやないか」

「おん... おん...」  
「あ...ん...あ...」

「ぴちか」

「どうですか先輩？」

「先っぽとか特にいい味してるぞよ」

「...おん... おん...おん...」



「なん...なん...舌をしゃべると動かして  
フェラだお上手くなってきましたね先輩!!」

「ん...むう...おあ...  
そ...そう...かな...?  
んむう...ん...ん...」

ぐほっ

ぐほっ

「この調子で頑張ればフェラテクでも  
西東京代表になれますよ!!」





「らしいのキキロや」笑みかけるかな  
今日はちょっと違う感じにするかな」

「んっ…?」

くちゅ  
くちゅ



「ほらココー」ふんふんよくストレッチとかして

無防備に晒しまくってたけど

ふんふんエロさを感じる男も多いんすよw」

「え？ あ!? やだ...そこ

そんなことする場所じゃないし...

あん！ くすぐりたい...よ...」

スリ

スリ

ビィッ!

「くすぐったいって感覚は

気持ちイイのと紙一重ですからねw

それに先輩...のズジいいし

すぐによくなりますよw」



「うき... 何で私...こんな...  
あ...!! だめっ!  
そこ強く擦られると...  
だめえ...だ...だめえ!」

ビィッ!

びわ...

おん

おん

「さすが先輩w もうココすっきり  
チ○ポに馴染んじやってますねw」



「フ○チ先輩の健康的なワキに種付けしww」

「やっ♡ワキ…熱…っ♡  
あっ…ああ…あ…っ♡」

ドクドク

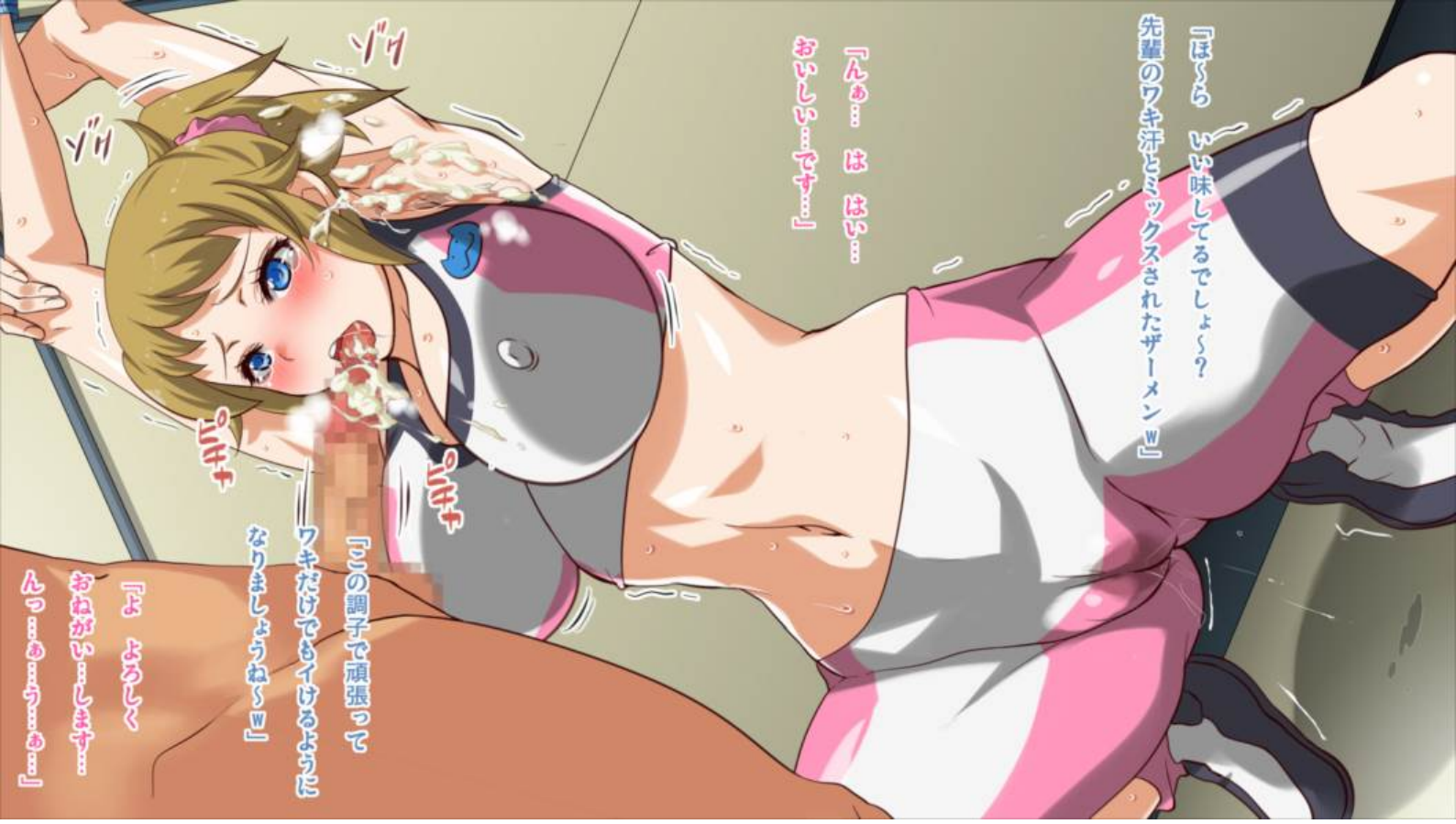
ビィッ!

「お、いい反応w」

「お、いい反応w」

「お、いい反応w」

ドクドク



「ほくら いい味してるでしょ？」

先輩のワキ汗とミックスされたザーメンw」

「んあ… は はい…」

おふくら…ふくら…」

ゾッ

ゾッ

おふくら

おふくら

「この調子で頑張って

ワキ汗とザーメンを混ぜると  
なまこ…おふくら…おふくら…」

「え ちんちん」

おふくら…おふくら…

ん…おふくら…おふくら…」



「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

うわっ... フビエに腹ロキしたんだけど

こんな染み作っちゃったんですか?」

はっはっはっ...

はっはっ...

「だ、だって... フビエ

あんなに汚いと思っただら...

恥ずかしくて...」

「恥ずかしいって思ったら

こんなになっちゃうんですか?

「DM丸出しの変態っすね先輩!」

「え、そんなんで...」



「サーッと普段着にしてたスパッツを  
自分でこんな『即ハズ仕様』に  
改造してて何言ってるんですかw」

ぽろぽろ...

ぽろぽろ...

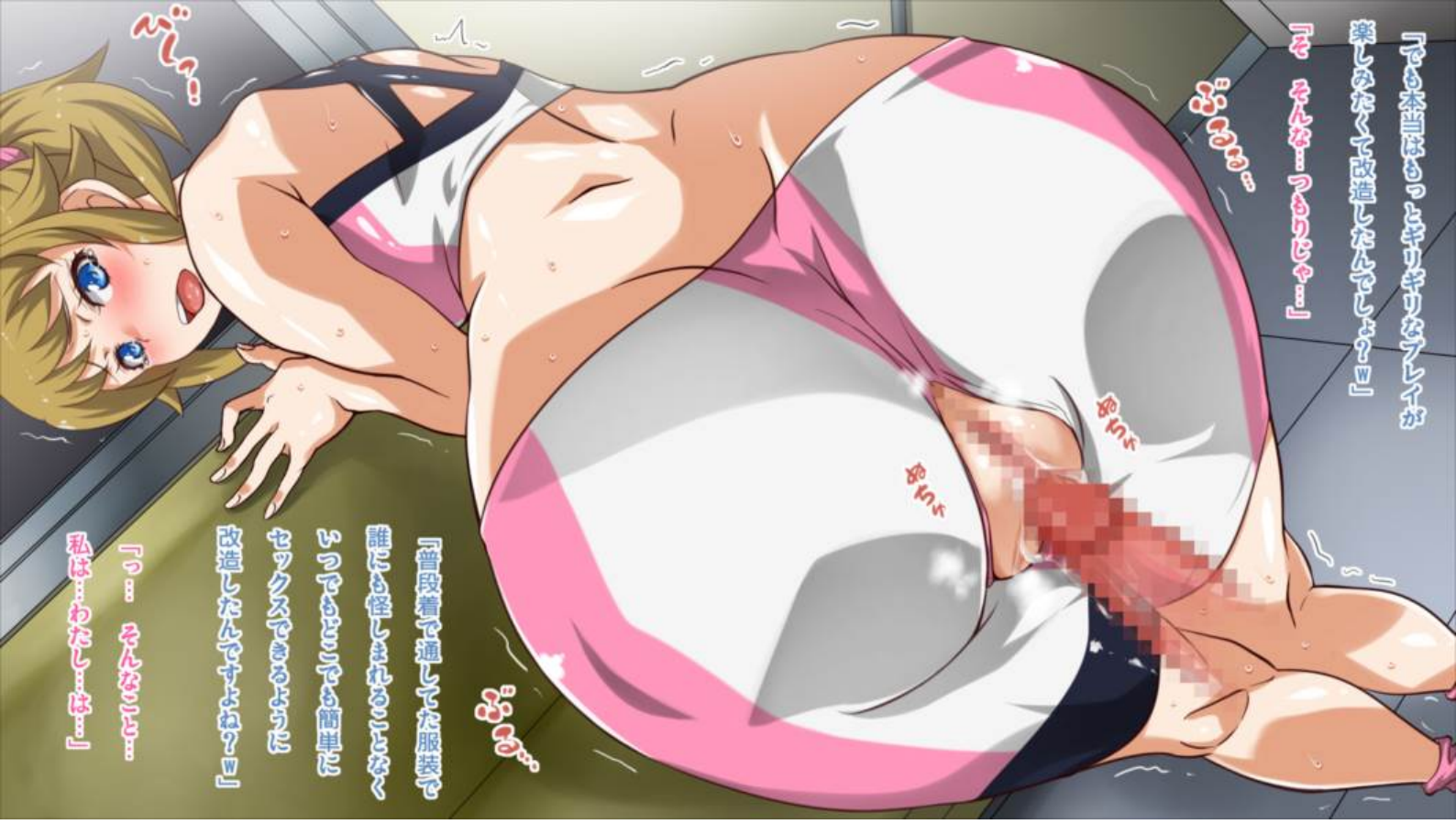
「あっ!? だ だって...  
こっしな人と人が来た時に  
うまく誤魔化せないから...」

「前に外でスパッツ脱いでしてた時に  
人に見られそうになったからですか?  
先輩ってガ○フラ以外の何でも  
改造セクストロップすねw」

「お水ははの、おきこりなアムレツだ  
楽しんでくた改造したんやアウ」

「や ややな... (casual) ...」

ぽろぽろ...



ぽろぽろ...

「普段着で通してた服装で  
誰とも怪しまれることなく  
ドドおんじゅも簡単に  
セックスできるように  
改造したんですよね？」

「っ... そんなこと...

私は...わたし...は...」





「あー じゃあもう止むかー  
何か先輩嫌そうだし」

ぐわん...

うん...

ぐわん...

「え!? そんな...  
そんなの... なぞから...  
ごうごう...」

ぐわん...



「...」

うたごえ...

うたごえ

うたごえ...

【...】

うたごえ...



「あー 何故かズキズキする  
あの場所が... ouch-ouch-」

ズキ...

SUN

SUN

SUN

SUN

ズキ...

「あー ouch-ouch-  
ズキ...」

ズキ...



「お 私は……君と  
いつでもすぐセックスできるよって  
スパッツを改造する変態女です!!」

「大事に守ってきた  
ガ〇フラバトル部の部屋で  
後輩とセックスしたくて  
オ〇ンコヌルヌルにしてる  
セックスが大好きな女です!!」



「...」

ズッ

ズ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

「...! ...!」

「...」



「おっ 挿入だけで撃くイ、めちゃ楽しかったワ  
どりゃあそす、このまま抜かして」

「はーい、どーぞ、おーい、おーい、おーい」

「うわっ」

「うわっ  
うわっ  
うわっ」

「だ…だめ…」

「それなら…私…」

「…わたし…」

「うわっ  
うわっ」



「ブーッブーッ 快楽オムツ」

「尿漏れ防止のオムツは、お尻から入る」

ゴホッ

びしょ

「ブーッ びしょッ  
や...だ...  
「びしょびしょ」



「おらっ！挿入イキしたばかりの敏感マ〇」

後継子〇はっほいっはっはっはっ ぶなびんやんせー」

びしょ...

グッホッ

びしょ...

びしょ...

びしょ...

グッホッ

びしょ...

「びしょ... びしょ...  
びしょ...びしょ...びしょ...」





「おはようございます！ 本日はおはようございます！  
おはようございます！ おはようございます！」

「おはようございます！」

「おはようございます！」

「おー、出た出た」

「即ハズ用スバツツの」

「使い心地も確認できたし」

「さっし発射しよときますか」

「おー、ス・バ・ツツ」

「……!? ……………！」

そ それは……！ ダメっ！  
それだけは……ダメっ！」

「……………」

「お願い……他のことなら

何でもするから……ね？ お願い……」

「……………」

「こんなことしておいて今更だけど……

ここだけは……汚さないで……お願いだから……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ごめなさい……」

私にお願いする権利なんて……ないよね……

ごめんなさい……言うとおりにします……」





「この上でお風呂のおんなを洗って、くせえ  
やっばり興奮してるんだやなぞ」  
「びしょ」

「びしょ」  
「びしょ」  
「びしょ」

「びしょ」

「びしょ」



「そんなに楽じゃかってからもドクドク  
垂れ流し状態だしといて何言ってるんです？  
パツと見てわかりますよそんなくらいW」

「お、そんなにいい...ないよ...

私...このバトルシステムのこと...  
とても大事にして...だって...  
チ○ム・ト○イ・ファ○ターズが  
生まれたきっかけも...この  
バトルフィールドの上で...だから...  
こんなこと...しちゃダメです...」

んんん...

ふっ...

メェ...

メェ...

ヒキッ

ヒキッ

ヒキッ



「くま〜 ちもさんを淫してちゃ  
バトルフィールドにマン汁たまって  
マン汁の湖でバトルしなきゃですねw」

「そ そんなこと…  
言っちゃダメ…だよ…!!  
君だって…ガ○ブラバトルを  
戦ってるのに…そんな…  
バカにするようなしよ…」

チキッ…

チキッ…

ちも…

ちも…



ヒキッ

ケキッ

だだめえ...

だだめえ!!

「あ!? やっ...!?」

「あ!? やっ...!?」

あ

あ

だだめえ...



ふる...

「誰か助けてー!」  
ガオンと震えて余裕で耐えられるでしょう?  
なんかすげーいい音してますけどW」

ヌキヒュ  
ヌキヒュ

「そういう... 問題じゃ...  
っ... あ...!! だめ...  
お願い... お願いだから...  
そ... それ以上は...」

ふる...





【ゆるゆるー ぬんぬん】

「ひっ…ん!

が我慢…できる…

【ゆるゆるー ぬんぬん】

【ゆるゆるー ぬんぬん】  
奥の方がパンパンに  
膨らんできてんぞ!?  
我慢できんのかコレ?w

ヌキッ  
ヌキッ  
ヌキッ  
ヌキッ  
ヌキッ  
ヌキッ



ヒキッ

ヒキッ

ヒキッ

ヒキッ

ふる...

「あっそ  
まあ精々  
頑張ってくださいよっ...!」

「P...ん  
~~~~~!!!」

ヌチユ

ヌチユ

ヌチユ

ヌチユ

ヒキッ...



ヒキッ

ヒキッ

「あっ!？」

「アゲアゲの尻  
エロエロなアゲアゲ」

「アゲアゲ」

「アゲ」



ヒキッ

ヒキッ

【oooooooooooooo】

【あーあーあー】

ぶっ

ぶっ

ぶっ

ぶっ



「ゴキッゴキッゴキッ」

「ゴキッ」

ゴキッ

キキッ

ゴキッ

「ゴキッ」

「ゴキッ」



「あーあ ヤッちゃった  
あーあ あーあ」

あーあ...  
[あーあ あーあ あーあ  
あーあ あーあ あーあ]

あーあ あーあ あーあ

ヒキッ

ヒキッ



はぁ...はぁ...

「うっ...うっ...あ...  
や...だ...そんな...  
恥ずかしい...うん...  
ら...はぁ...はぁ...」

ヒキッ

ヒキッ

「15分間の  
バトルフィールドは  
『潮の湖』ですねw」

ホッ

ホッ

キョロ

キョロ

ぷる...



ヒキッ

ヒキッ

「や……！ ちょっと……と……  
今……敏感……だから……だめ……！」

「ほらほら 早く『潮の湖』で  
パトルスガードしましょうよ〜W」

チキッ……

チキッ……

ぷる……

ぷる……





ヒキッ

ヒキッ

ふる...

「だって 自分の潮でマーキングして  
今更もう何の抵抗もないでしょ?w」

「そ...んな...あっ!  
んんっ! そこ...擦っちゃ...  
や...だ...そ...弱...」

メエ

メエ

メエ

メエ

ふる...



ドキッ

ドキッ

ふる...

「先輩が素直になれば

もーっといイもので

思いっきりこの穴の中

ほじくってあげますけど?w」

ふてふて

ふてふて

ふてふて

ふてふて

「え...? あ...

でも...私...っ...ん!

あっ! ああ!」

ふる...



「こんな指なんかより  
ぶっといち○ホで  
膣内ゴリゴリ  
擦って欲しいでしょ?」

「あっ!! あっ!!  
や...!! んっ!!  
あっ!! うああ!!」

ふっ...  
ふっ...  
ふっ...  
ふっ...

ふっ...

ふっ...

んキッ

んキッ

んキッ

んキッ



「手マンと潮吹きで仕止がった  
敏感マ○コにチ○ポぶち込まれたら  
どんな感じでしょうねえ？」

「はう……！ ん……あ……！  
っ……うあ……！ あ……！」

チ○ポ

チ○ポ

チ○ポ

チ○ポ

ヒキッ

ヒキッ

ぷるっ

ぷるっ



ドキッ

ドキッ

「ん……！っ……あ！  
……て……くだ……さい……」

「ん？ 何ですか？  
何か言いたそうですけど？」

ドキッ

ドキッ

ドキッ

ドキッ

ぷるっ

ぷるっ



ドキッ

ドキッ

「い いれ...て...んっ!  
くた...ら...」

「あー 回...」

ズン

ズン

ズン

ズン

あ...

あ...



「……っ」

「……」

ヒキッ

ケキッ

ふっ

ふっ







ドキッ

ドキッ

ぷる...

「お おち○ポ...！」

おち○ポ...ちようたい!!!

もう...ガマン...無理っ...!!!

「早く! 早くズボズボしてえ!!

フ○ナのヌルヌルのオ○ンコ

チ○ポで無茶苦茶にかき回して

思いっきりイかせてえ!!!

ぷる...





「はは、その反応を」

今のゲーム設定は

ふる...

「奴等、ドモモドモドモ」

ゴッホッ

ゴッホッ

ガッ

ガッ

ヒキッ

ヒキッ

ヒキッ

ヒキッ

ふる...

「あ、あ、あ」

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ」



「このバトルが終わる頃には

ぷっ！ フォナの大事なもん ダメージで

全部がっ喰らっちゃっけりかなくマ」

ゴッホッ

ゴッホッ

キキッ

キキッ

「あらっ♡ 壊れちゃっ♡♡

「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡



ぶる...

「カノキの野郎との関係も  
バトル部を守ってきた想いも  
ファイターとしての誇りも  
全部も修復不可能だなーW」

全部も修復不可能だなーW

ゴッホッ

ガキョ

ガキョ

ゴッホッ

「んあぁ... ぶるぶる...」

全部壊してええぞ...

「んあぁ... ぶるぶる...」



おっ...

「おっ... なんだ...」

「おっ... なんだ...」

ゴッホッ

ゴッホッ

おっ...

おっ...

ヒキッ

ヒキッ

おっ...

おっ...

「おっ... なんだ...」

「おっ... なんだ...」



「ごめんなさい...」  
「ごめん...」  
「ごめん...」

「さっさと入るさあーM」

ゴッホッ

ヒキッ

ヒキッ

ゴッホッ

「なんでもないさ」  
あ あ 赤ちゃん...  
何かあやしいやん... 4... 4...



「やっ、熱くムロムロの精液を」

「ふっ… 腹の奥に直接流して欲しい」

「女の事を愛してる」

「種付けされちゃうんですけど…」

ゴッホッ

ゴッホッ

ヒキッ

ヒキッ

ヒキッ

ヒキッ

ヒキッ

ヒキッ

「そんな…そんなのじゃ…」

「あんな…」







「ムムムムの音が、響く」

「部活の音が学校の外から聞こえる」

「毎朝の音は、響く」

「あはあ、これー、」

私、本気で終わっちゃうわー

んあっ、あはああああ」



「ハッサーW ーサーと」

仲間のサポートに徹して先陣が

やっとな自分本位の「ハッサー」

僕の「ハッサー」

「んあああ♥」

私も...「ハッサー」♥

「ハッサー」

「ハッサー」



「あー やっぱ妊娠了解した

女のマ○コって最高だよW

膈内で射精してほしちもんだから

ギチギチに締め付けて離さねえよW」

ぶっ...

ヒキッ

ケキッ

ゴッポッ

ガキョ

ガキョ

ゴッポッ

「あーっ あーっ あああ

あやうさあやうさ 何日かいっ

あやうさ... 『妊娠了解したから』 っ

子宮ノマ○コにっ... あーっ」







「ヒキッ... ヒキッ...」  
「ヒキッ... ヒキッ...」  
「ヒキッ... ヒキッ...」  
「ヒキッ... ヒキッ...」

「ヒキッ... ヒキッ...」  
「ヒキッ... ヒキッ...」  
「ヒキッ... ヒキッ...」  
「ヒキッ... ヒキッ...」









「んっ♡ 嬉しくて♡気持ちよくて...  
最高の♡気分...だ♡♡♡♡」

「んっ♡ 最高の♡気分...だ♡♡♡♡」

ヒキッ

ケキッ

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡



「これからカンカン生ハメして  
早く赤ちゃん生んで  
今の自分をぶち壊そうなW」

「うん♡ 頑張って  
妊娠...すまから...  
♡ 499... ♡」

ヒキッ

ヒキッ

ぷる...

ぷる...

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

ぐー...  
ぐー...  
ぐー...

ぐー...  
ぐー...  
ぐー...

——さて、これで一匹目は完全に躰が完了した。

もともと自己犠牲の気が強いところにM体質も手伝って

堕ちるところまで堕ちた感じだ。

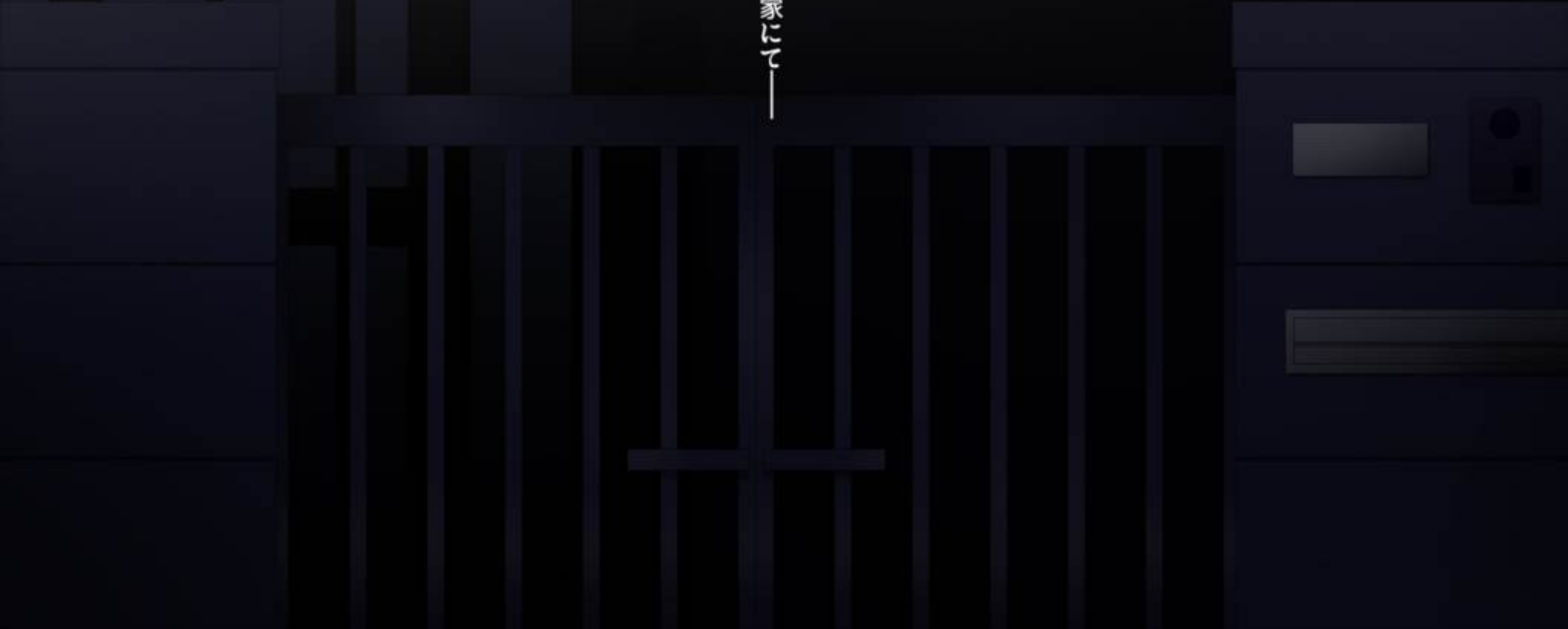
ここまで躰ければ他の場面でも役に立ちそうだ。

しかしまだこの後二匹も躰が残ってるから大変だ。

さあ、どちらを先に躰けるかな——



某日、カ○キ家にて――



俺のセフレになって以降  
散々俺の家や学校でハメまくったにも関わらず  
自宅でのプレイは弟バレを恐れて  
頑なに拒否してきたミ〇イ。



そこで俺はフ〇ナを使って  
カ〇キを夜遅くまで家から遠ざけ  
その間にヤツの家に乗り込み  
ミ〇イと楽しむことにした——

「本当に…大丈夫なのかしら…?」

「だから今日はあの二人は部室で

〃居残り練習〃ですって〃

僕とこのサカ君は先帰れっつうさまで〃〃」



「確かに…今日は遅くなるって

私にも連絡があったし…

二人がああいう関係なら…

それってきつと…

そうぞういふか…」

——実際にカ○キは、バトルの練習、Gミュ○ズで買い物、

コ○サカの店で食事、という、俺がフ○ナに指示した

極めて健全なプラン（笑）につき合わされてるだけなのだが、

俺の仕込みのおかげで、ミ○イは勝手にエロい妄想を膨らませ、

自分の中の『スイッチ』を入れる——



『私は、弟がクラブの先輩と部室でセックスしてる時に、

自分もまた弟の友達を自宅に招き入れセックスするダメな姉』

——両親不在の家庭で姉として弟の保護者の役割を務め、

気を張って生きているミ○イは、こうやって自分を貶めることで、

ようやく爛れた性の世界にどっぷり浸ることができるのだ——





「あ！ も もう...？  
じゃあ私も制服着替え！」

ビーン

ビーン

「あー先輩は脱がなくていいですわ  
つかそのままがいいっすw」

「え...」

ドクドク

「あっ……ん……！」

「しかし先輩の肌ってほんとスベスベっすね  
このチ○ホ美颜マッサージと  
ザーメンバックのおかげかな？w」

「ん……………」

スリ

スリ

んんん

んんん

「カ○キ・ミ○ラのフェラチオで美颜！」  
なんて美容法の本出せるかもですねw」

「……………」



「ばーい 次は唇をしっかりとがらせてー」

チ○ポに押し当ててプリプリ子悪魔リップを作りましょうーw」



んむっ

んむっ

ちゅ

ちゅ

「んむ……ん……ん……」



「続いて舌を動かしてー」

『ガイド棒』に沿って上下左右ー

それからグルグル回しましょうーw」

「...」

ぐわ

ぐわ

ぐわ

ぐわ

「では口を開けてー しっかり啜え込んで頸を鍛えて  
フェイスラインを引き締めましょうーw」



「おっっ…んっ…むっ…」

どきどき

どきどき

ぞい

ぞい

グッ  
グッ  
グッ…



「はーい こうして喉の奥まで挿入すれば  
発声も鍛えられて「石」鳥ですわーw」

「んっ! んぶっ! んんっ! んう!」

「リズムミカルに動かしてー 舌も絡めて動かせば  
滑舌のトレーニングにもなりますねーw」



どきっ

どきっ

でい

でい

グッホッ

ぐっ

ぐっ

グッホッ

「んっ！んっ！んんっ！  
んぶう！ん…お…！」

「最初は苦しくても唾液がたくさん出て

動きを助けてくれるので大丈夫ですよーw

あー いい音がしますねーw」



どきッ

どきッ

ぞい

ぞい

ぐっ  
ぽっ

ぐっ  
ぽっ

ぐっ  
ぽっ

「おっ...んお...!  
んおっ! んっ! んむっ!」



「はいそれでは仕上げて  
ザーメンバックをしましょうねーw」



「ん... せ... せ... せ...  
ん... せ... せ... せ...」

ん... せ... せ... せ...

ん...

でい

でい

でい



ぞい

ぞい

ぽんぽん

ぽんぽん

ビュッ

ビュッ

「んあ……あっ！」

「……あ……あ……あ……」

「お疲れ様でしたーW バックに使ったザーメンは  
もったいないので集めて飲んじゃってくださいねーW」



「……はぐ……おんなじで……  
おんなじだ……」



「あ……やっぱり……これ……ちょっと恥ずかしくて……」

「えー？ 先輩の大好きな

チ○ホじゃぶりながら

オ○ンコも気持ちよくなってる

お得意じゃないですかーW」

ぷんぷん

クチュ

クチュ

「……おっぱい……」

……んんん

……んんん

んんん

びんちん

びんちん

「いっせいで普通は……」

「……先輩も……」

「……」

んんん



「何、そんなに... セ○は... あっ...」

「あれ？ 何か急に」

「反応良くなってませんやw」

「アッ」

「アッ」

「アッ」

「フ○ナ先輩にギンギンの

チ○ポじゃぶらせながら

オ○ンコ味わってるんですかねえ...

セ○イ君も...」

「アッ...」

「アッ...」

「アッ」

「アッ」

「アッ...」

「アッ...」

「アッ」

「アッ」



「そしてお姉さんのミ○イ先輩は

セ○イ君のお友達とお○ン○ロとられながら ぱ○ん○

その年下チ○ポを味わってるとw」

「わ「私は……」

ぐちゃ

「弟のセ○イ君も楽しんでるんだし  
ミ○イ先輩も楽しまなきゃw」

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

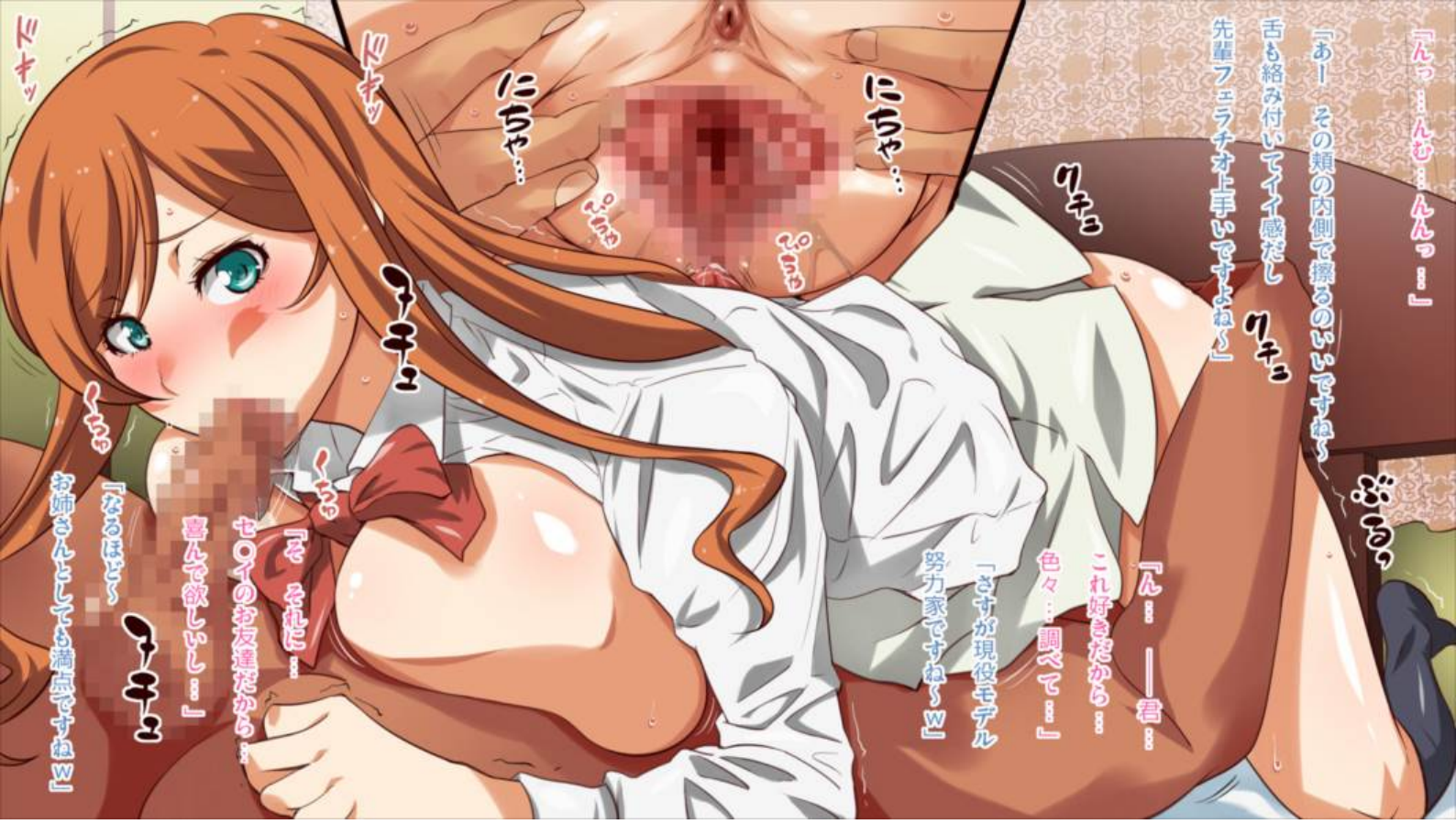
ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

「……………」

ぐちゃ



「んっ…んむ…んんっ！」

「あーその類の内側で擦るのびしょすね」

舌も絡み付いてイイ感じ

先輩フェラチオ上手いですすね」

「ん…君…」

これ好きだから…

色々…調べて…」

「さすが現役モデル  
努力家ですなw」

びしょ…

ぐちゃぐちゃ…

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

んっ

「ん…んん…」

セーのお友達だから

喜んで欲しい…」

んんん

「んんん…」

お姉さんとしても満足ですなw」

びしょ



「だったら僕も一生懸命にやっ  
喜んでもらわないとダメですねW」

「んっ！んよう！  
んんんんん！」

「ほら  
ち○ぽしっかり睨まて！」

グチュ  
グチュ

ぐほっ

「あっ！んんんんん  
んっ！んんんんん！」

ミヤッ





「モデルのカ○キ・ミ○イがケツの穴まで晒して

男のチ○ポしゃぶって「イ○ロ賣らされて感づいて」

ファンの皆に教えてあげたら」すねW

「んっ!?!んっ!?!」

「んっ!?!んっ!?!」

「んっ!?!」

「んっ!?!んっ!?!」

「んっ!?!んっ!?!」

「んっ!?!」

「んっ!?!」

「んっ!?!んっ!?!」

「んっ!?!」

「んっ!?!んっ!?!」

「んっ!?!」

「んっ!?!んっ!?!」

「んっ!?!んっ!?!」

「んっ!?!」

「んっ!?!んっ!?!」

「んっ!?!」







「シックスナインでサーメン飲まされながら  
イっちゃうとか エロすぎっすねw」

ぷんぷん

「はっ... あっ...」

ん... あ... は... あ...」

「ほら 一人でとんでないで  
まだ終わりじゃないっすよw」

いっ...

ぷん

ぷん

いっ...

いっ...

びん

びん

「ん... ぽ... ぽ...」

いっ...

「あー！！ だ だめ…！ アレ…着けてない…」

「あ 今日忘れちゃってー  
スミマセーンW」

「んっ！ だ だめなの…本当に…  
今日…危ない日…だから…」

「あー それでこんなに汗出して  
チ○ホ欲しがるんですわW」

「な 何を…言ってる…」

「女の本能で 先輩の体が  
『種』を欲しがってるんですよ  
それでチ○ホが入りやすいように  
ドバドバ汁出しちゃってますよW」





「そんなワケ…ない…わ…!! んっ!  
やっ…」

「だめ…だめ…だから…」

んっ  
んっ

「ほらー クリもこんな敏感になって  
気持ち良くなるの手伝う気満々だし  
穴だって汁たっぷり溢れさせて  
体の方が種付けの準備してるのに  
頭が逆らってちやダメでしょーw」

「体が…求めて…」

「そ…そんなこと… あう…!!」

「ね？」



「ダメですかー?w」

「そんなの...うっ...!!  
わから...ない...  
わからないわ... あうう!!」

どき

どき

どき

どき  
どき



「ダメですかね？」

あーん...  
あーん...  
あーん...

あーん

あーん

ドキ

ドキ

「んっ！わ 私...  
うっんう！ ああ！」





ドキ

ドキ

「うっすよな(笑)」

んあ! あっ!

うっす

うっす

あーりー...



ドキ

ドキ

「あーもう  
全部入っちゃったw」

「あー! あーん!  
あ...あ...」

はっはっ

はっはっ

はっはっ



「あー やっぱ生だと  
気持ちいいわーW」

クオホッ

クオホッ

クオホッ

クオホッ

「あっ！だめ…  
だめ…っ…！ああっ！」

ドキ

ドキ



「先輩も膣壁擦られる感じが

ゴムしてるのとじゃ全然違うでしょ?

このカリーで引っ掛ける感じは

ゴムだと出ないですからねーw」

「んっ! んっ!  
んっっっ!」

ワオッ

ワオッ

stis

stis



「あの一 実はずねー  
僕ゴム持ッてんですけどぉー  
一日抜いて着けましようか?w」

「ん...うん... じ...ふ...  
ハハハハ... 精...」

「ん...うん... じ...ふ...  
ハハハハ... 精...」

ワオホッ

ワオホッ

ワオホッ

ワオホッ

ドキ

ドキ



「でもおー 今日  
危ないんでしょーw」

ワオホッ

ワオホッ

stis

stis

ド+

ド+

「さ...さ...  
...ん...ん...  
...ん...ん...」



クオホッ

クオホッ

クオホッ

クオホッ

「ははっw

やっど保護者役から

解放されましたねw

いいんですよーそれでw

女の幸せ求めなきやw

ドキ

ドキ

「しあわせ...♥女の...  
しあわせ...♥んっ」



「はー けろあかちゃんに癒めなぞして

『幸せの証』を飲しが、いままさかW

クオホッ

あはは

あはは

クオホッ

あはは

あはは

「あー  
あうう」

ドキ

ドキ

「元気な赤ちゃん

生みましようねW」

「!? ああか…ちゃん…

あっ♡ あはああ♡」





「これからはセ○イのいとなんか忘れて

俺と赤ちゃんと三人で楽しくやろうなミ○イワ」

「ク○ホ○」

「ク○ホ○」

「ク○ホ○」

「ク○ホ○」

「ク○ホ○」

「ク○ホ○」

「あっ♡♡ 赤ちゃん

赤ちゃん♡♡ んっ♡♡ んあ♡♡

あっ♡♡ んあああ♡♡」

「ドッ」

「ドッ」

「ドッ」 じゃあ孕ませっ

やぶるがっなミ○イワ」

「おはああ♡♡

あっ♡♡ 孕ませっ♡♡」





「今日でお姉さん卒業かな」  
なあ ミ〇イ?w

「っ...あ...あ...んっ...」  
あは...あ...ん...

ぶっ

ぶっ

はっ  
はっ

はっ

はっ



これでミ○イはいつでもどこでも好きな時に楽しめるようになったかな。

今度はカ○キがいる時に家上がりこんで

見つかるかどうかギリギリのプレイなんてのもいいな。

ここまで頭がトんじまえばフ○ナと三人でプレイするのも可能だな。

三人……いやいやあと一人追加して四人で楽しむ方が面白そつだな。

あと一人……そつ、カ○キのことを追い回してるあの……

某日、某駅にて――

フ○ナとのハメ撮り動画を利用したものの、  
その後ほぼ正攻法で落としたカ○ルコとは、  
すっかり普通のカップルのような付き合いが続いていた。

普通にデートして、普通にセックスする——そういうことだ。



それはそれで楽しいのだが、

すでに奴隷を二匹手に入れてる俺としては、

カ○ルコもそこに加えて楽しみたいと考えていた。

今日を境にカ○ルコを恋人から奴隷へと変えるべく、

俺は彼女を近くの駅に呼び出した——

「ええ♡」



「じゃあ 行きましょっか」





「んっ…あ…あなたって本当にコレ好きよね…」

「さーだっつ カオレさんの  
インポロサ、ズク 気持ちはすきだからーん」

ドキ  
ドキ  
シム

ウキウキ

ウキウキ

ドキ

「そうなんだ…でも私なんかの体で

喜んでもらえるのって悪い気しないわね…」

「そんなに卑屈にならなくても

カ○ルコさんはメチャクチャ魅力的ですよー」

らりん

ぎゅっ





「やまないよ... だっだっやまない...」

「ちんちんを揉む時は

かたむね「お尻を揉む時は」

「や やいや...」

「やらないでよ...」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「そうですよ、それにほら

今はカオル君さんの魅力で

こんなにチ○ポカチカチにしている

ヤツがいるんですからW」

「んん... 嬉しい... ありがとう...」

「んんん」



「あーカオルヨさんのおっぱいで  
両方からギニツとされるのたまんないッス

「肩ッ肩ッ肩ッ肩ッ出ッって感じでw」

「バカ... もう...」

「何で私こんな人なこと...」

「スママセン 不真面目でw  
でも気持ちいいのは本当ですからw」

「ドキ」

「ドキ」

「ドキ」

「シム」

「シム」

「シム」

「ドキ」

「どうだね...」

「君は 私のすぐそばで」

「本当に喜んでくれるものね...ありがとう...」

「頑張って気持ちよくするね?」

「はい... 思いっきり気持ちよく」

「させていただきます!」

「シム」

「ぎゅっ」



「...嬉しい...♡ あび...ん...♡」

「ねぇ... やせたら...」

「んぶ...♡ んら...ん...♡...♡...♡」

「んぶ...♡ んら...ん...♡」

ドキ

ゴポッ

ヒビ

ドキ  
ゴポッ

ゴポッ

ゴポッ

「カ○ルコさんって おっぱいも口の中も  
ゼーんぶムチムチ  
フワフワで最高っす!」



「んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」

うっ♡♡♡うっ♡♡♡んっ♡♡♡んっ♡♡♡」

「やっ...もう射精の...」

カオルコさん 顔を射撃すよー」

ドキ

ゴッポッ

ヒッ

ヒッ

ドキ  
ゴッポッ

「んっ♡♡♡んっ♡♡♡」

か かけてえ♡んっ♡♡♡んっ♡♡♡」

ヒッ

ヒッ



「んっ♡んっ♡あ  
あはあ♡♡♡♡♡」

ゴキョ♡

ドキ

ドキ

ゴキョ♡

「す」…♡熱…♡  
んんん♡♡♡♡♡」

ドキ  
ドキ  
ドキ

ぎゅっ





「うわっ…まだ触ってもないのに  
もうヌルヌルですね♡」

「ん…胸でするのだから  
結構気持ちいいんだから…って…  
そんなこといいから…おええええ…」

おえええ

おえええ

おえええ

おえええ



「あーちょっと待っててくださいね...」  
ゴム ゴムっと...」

「...あ...え...と...」  
「...あ...え...と...」

「その...パンですか？」

「え...え...え...え...え...え...」  
「...あ...え...と...」

「あ...あ...」  
「あ...あ...あ...あ...あ...あ...」

シッ

シッ

シッ

シッ







「ほんとカオルコさんの体って  
どっどっ優しく包まれる感じがして  
凄く癒されますよー」

「あっ…ん♡ ホント…じ？  
私の体で喜んでくれるの？ 嬉しい…♡」

「でも 何で今日は  
生でする気になったんです？」

「あっ♡ 前にそっちの方が  
好きって言ってたから  
もっと喜んでほしくて♡」

「他にもしたらどっどあれば…  
何でもしていらわよ♡」

「ドクドク」

「ゴッポッ」

「ゴッポッ」

「ドクドク」

「ドクドク」

「ドクドク」

「ドクドク」

「ドクドク」



「アハハ... 旦那さん(お前さん)がアハハ...」

ゴッポッ

ゴッポッ

「アハハ」

ゴッポッ

ゴッポッ

ゴッポッ

ゴッポッ

ゴッポッ



「あー やっぱり思った通り  
イイ叩き心地だよ」

パンパン

きん

「やっ…だ…」

叩いちゃ…だ…め…

ダメ…だ…は…あっ…

だ…だめえ…

「ダメって言う割に  
叩かれる度に  
キュツキュツって  
締め付けてきてますよ」

「それ…は…」

叩かれると…奥の方が  
痺れて…あっ…ん…

ゴッポッ

ゴッポッ

きん

ゴッポッ

きん

ゴッポッ

きん

ゴッポッ

きん

ゴッポッ

きん

ゴッポッ

きん

ゴッポッ

きん

ゴッポッ



「尻を叩かれながらするセックスは気持ちいいか カオルヨ？」

パン  
パン  
パン

きゅん

「あっ♡ あっ♡

ああ~~~~♡♡♡♡

「気持ちいいかって訊いてんだよ！」

「あはあっ♡♡♡♡

きゅん 気持ち良い♡

「気持ちいいです♡」

きゅん

グッ  
グッ  
グッ

グッ  
グッ  
グッ

きゅん

パン  
パン  
パン

きゅん

きゅん



「ガ○ラバトルじゃ男顔負けで  
名門女学校に通ってるお嬢様が  
ケツを叩かれながらセックスして  
アへる変態とは呆れたよw」

「んあっ♡ 変態っ?!♡  
この私に変態っ?!♡  
っあ♡ あはあああ♡♡♡♡」

まっし

まっし

ゴッホッ

パッパッ

「普段の強気なキャラだって  
虐められたい気持ちの裏返しなんだろ?  
いつもバトルで  
ぶっ潰してる相手みたいに  
自分がメチャクチャに  
されたかったんだろ?」

「あっ♡ わ 私がい  
メチャクチャに?!♡  
んっ! あ♡

あっ♡ ああっ♡

びびっ

びびっ

びびっ



「おら ケツ真っ赤になるまで

叩かれていけよ マン女W」

パンパン

きんきん

ガッポッ

きんきん

ガッポッ

パンパン

びびび

びびび

きんきん

びびび

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」

「おら...」



「二人だけ気持ち良くなってんじやねえよ  
こっちはまだ種付け終わってねえんだよ」

ハイハイ

「種…付け…?」

まっし

まっし

そそれって…  
まじか…!」

「おら 続けんぞ  
カ〇ルコ!」

「ばはは♡♡♡」

びび

びび

びび





ゴッホッ

ゴッホッ

ぶっぶっ

ぶっぶっ

「あー カオス」

「あー カオス」

「ぐっぐ」

「あー カオス」

「あー カオス」

ぐっぐ

ぐっぐ



「ズキズキと乳が揺るっ  
トO乳輪が伝わる快感を  
この胸が愛し」

ゴッホッ

ゴッホッ

ぶるる

ぶるる

「おはぁ♡

豚♡豚♡

おっ♡」

ぶるる

ぶるる







「お嬢様でガン○ラバトルのファイターで

気の強い鼻持ちならない女の仮面を

今ナマでハメてお尻に

たっぷり精液流し込んで孕ませて

全部ぶっ壊してやるわー」

ゴッポッ

ゴッポッ

ぶる、

ぶる、

「あはあああああ」

壊して♡壊して♡

全部めちゃくちゃ♡♡♡

してええええ♡♡♡」

♡♡

♡♡



「ちゃんと学めたら俺のこころで  
もう一度お前を殺さなくちゃ  
いけないからねさあ」

「あっ♡ほ本気でっ♡  
んっ♡んあっ♡う腐してっ♡」

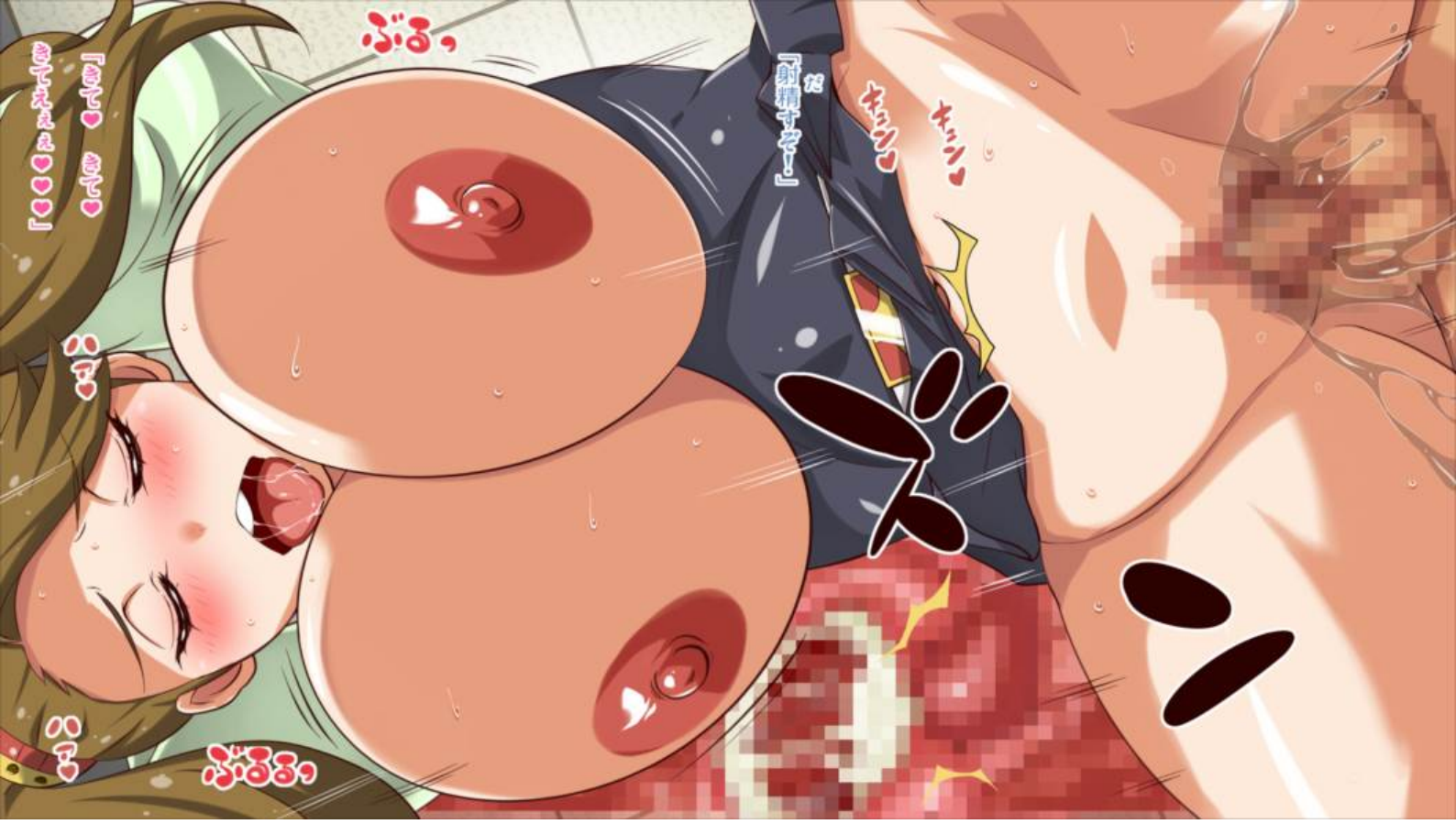
ぶるぶる

ぶるぶる

ゴッポッ

ゴッポッ











これでカ○ルコはこれまでの自分と正反対の行動こそ

自分に相応しいと考えるようになるだろう

普通の甘い男女の関係など自分には似合わない

乱れきった性の泥沼こそ求めていたものなのだ

さあ準備は整った

みんなで楽しいパーティーをはじめようじゃないか





数週間後、あるホテルの一室にて――

「ふふふふ今日はおもてなしの準備はいいわー」  
おっぱい



「おっぱいおっぱいおっぱいおっぱい♡」  
おっぱい



「おっぱいおっぱいおっぱいおっぱい♡」  
おっぱい

「おっぱいおっぱいおっぱいおっぱい♡」  
おっぱい



「あーっ」 それじゃあとりあえず

「口は綺麗だけれどもちがうかな」

「あーっ」



「あーっ」

「んー 誰から行かんかーW」

「あーっ」



「あーっ」

「じゃあもうOから履き直してちがうかなー」

「あーっ」



「あーっ」







「はー ... 可愛いお嬢さん ...」



「濃汁が飲めるとラッキーだなさー」



B





「はー...ん...ん...ん...ん...ん」



「うーし じゃあ次はフナね」





「アロー アロー アロー アロー」

ホキキー

びゅー



ホキキー

びゅー



ホキキー

「目立つ汚れを落とした後は  
カカミ突っ込んで、口全体を擦って  
いたってな言をいちゃって落しなすうが」

「目立つ汚れを落とした後は」

カカミ突っ込んで、口全体を擦って

いたってな言をいちゃって落しなすうが」



Eh...

Eh...

「うん...うん...」  
「うん...うん...うん...」



ボキッ!

ボキッ!

「喉奥も突いてヌルヌルの  
洗浄液を出して...とW」



Eh...

Eh...

「喉奥も突いてヌルヌルの  
洗浄液を出して...とW」





「あはあは...」

「あはあは...」

あはあは...



「あはあは...」

「あはあは...」

あはあは...

「あはあは...」



「あはあは...」

「あはあは...」

あはあは...



「可愛い♡♡♡可愛い」

「じゃあ 仕上げ頼むわ カルコワ」

Butt

Butt

Butt

Butt

Butt

Butt

♡







「もう今までの自分を捨てて去ったから  
ライバルだったフナと間接キスしても平気だな」



「んんん」  
「んんん」

「どうやら生まれ変わったカオルコの姿を見てると  
ムットとしてやって本誌「展か」なと思っちゃった」



「よしそれじゃあみんな一緒に楽しもうか?」

Bye



Bye

「さよなら」

Bye



Bye

「さよならさよなら」

Bye



Bye

「さよならさよなら」



「あーっ」

「おいカオルコ ちま自分が  
何してるからよ」言葉は「なるM」

「は ははは」

「ま私は...あ」

電マを使って...んんっ

おオナロー...しんがす

もあし...さ...回回...

「いっ...あ...」

ゴボゴボ

「あー」

あと2回イったら

フ○ナと交代

させてやるから

しっかり

「いい声聞かせるとW」

ぶる...

「は はは」

あっ♡ あっ♡

あーっ♡♡♡♡

あーっ

あーっ

あーっ



ふんふん...

ふんふん...

「ほら 下でフONAが  
頑張ってたんだから  
とOイももっと頑張って  
」  
「絡むよな」

「ガボッ  
」

ふんふん...

「ほい...んん...あ...  
う...んん...うん...  
ふん...ん...  
んん...んん...」

ふんふん...

ふんふん...

ふんふん...



ふぶぶ...

「おん...おん...」

お前のイロニ...

プチ込むまで萎えなごようだ

しっかりしゃぶれよー

おらー 喉奥もちゃんと使えー!

グボッ

「んっ...んっ...んっ...」

んっ!んっ!

んっ!んっ!んっ!んっ!

う...お...ん...ん...」

グボッ

ふぶぶ...

ふぶぶ...

ふぶぶ...

ふぶぶ...



「んあぁっ♡  
こめんなさい♡  
こめんなさい♡♡♡♡♡」

「おいフ○ナ イラマさせてた間は  
『私はまだまともよ』みたいな顔してくせに  
マ○コにプチ込まれた途端終わっちまったなw」

ゴッ

ぐっ

ぐっ





「あゝ♡ おまがら  
じまけつううう♡♡♡」

「全国大会が終わるまではそうやって  
少しばかりの理性は残しといてやるけど  
腹が膨らんできたら発情しっぱなしの  
メス豚に徹底調教してやるからなw」

「あゝ♡」

「あゝ♡」

「あゝ♡」

「あゝ♡」

「あゝ♡」





「カ○ル○ヨはバトルも止めて  
こっちは本だから  
すっかり仕上がって  
素直なもんだなw」

「あぁん♡ だって  
こんなの教えられたらぁ♡  
もう戻れないわよ♡  
あっ♡ あはぁ♡」



「よしよし 腹が膨らんだら  
俺のここに来るんだから  
自分の自由にできる金を  
たっぷりフルしとけよw」

「はいっ♡一緒に暮らすの  
楽しみですっ♡  
カ○ルコのこと  
毎日可愛がってください♡♡♡」

ガッ  
ホッ

ガッ  
ホッ

サッ  
サッ

サッ  
サッ





「ミ〇イは二人より大人な分  
モデルや姉の顔と肉便器女の顔を  
うまく使い分けてるよなあw」

「んっ♡ だって♡  
まだ…セ〇イや  
ファンの人が…いるから♡  
いつもは…ちゃんと  
してないと♡  
あっ♡ んあめ♡」

ガッ

ガッ

セーイ

セーイ

セーイ

セーイ

セーイ

セーイ

セーイ

セーイ

セーイ

セーイ



「はは それじゃお腹が膨らんできたら  
カ○キとファンに上手く説明してやれよw」

「は……ん  
んあ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡  
んああ♡♡♡♡♡」

ガッ  
ガッ

ガッ  
ガッ

サッ  
サッ  
サッ

サッ  
サッ  
サッ







「あはあああああ♡♡♡♡♡」

「あああああああ♡♡♡♡♡」

Kii

Eo

E

「おら まだ射精ろぞー！  
口開けて舌出せメス豚どもー！」

さっしゅー  
さっしゅー  
さっしゅー

さっしゅー  
さっしゅー  
さっしゅー


さっしゅー  
さっしゅー  
さっしゅー

さっしゅー  
さっしゅー  
さっしゅー

さっしゅー  
さっしゅー  
さっしゅー





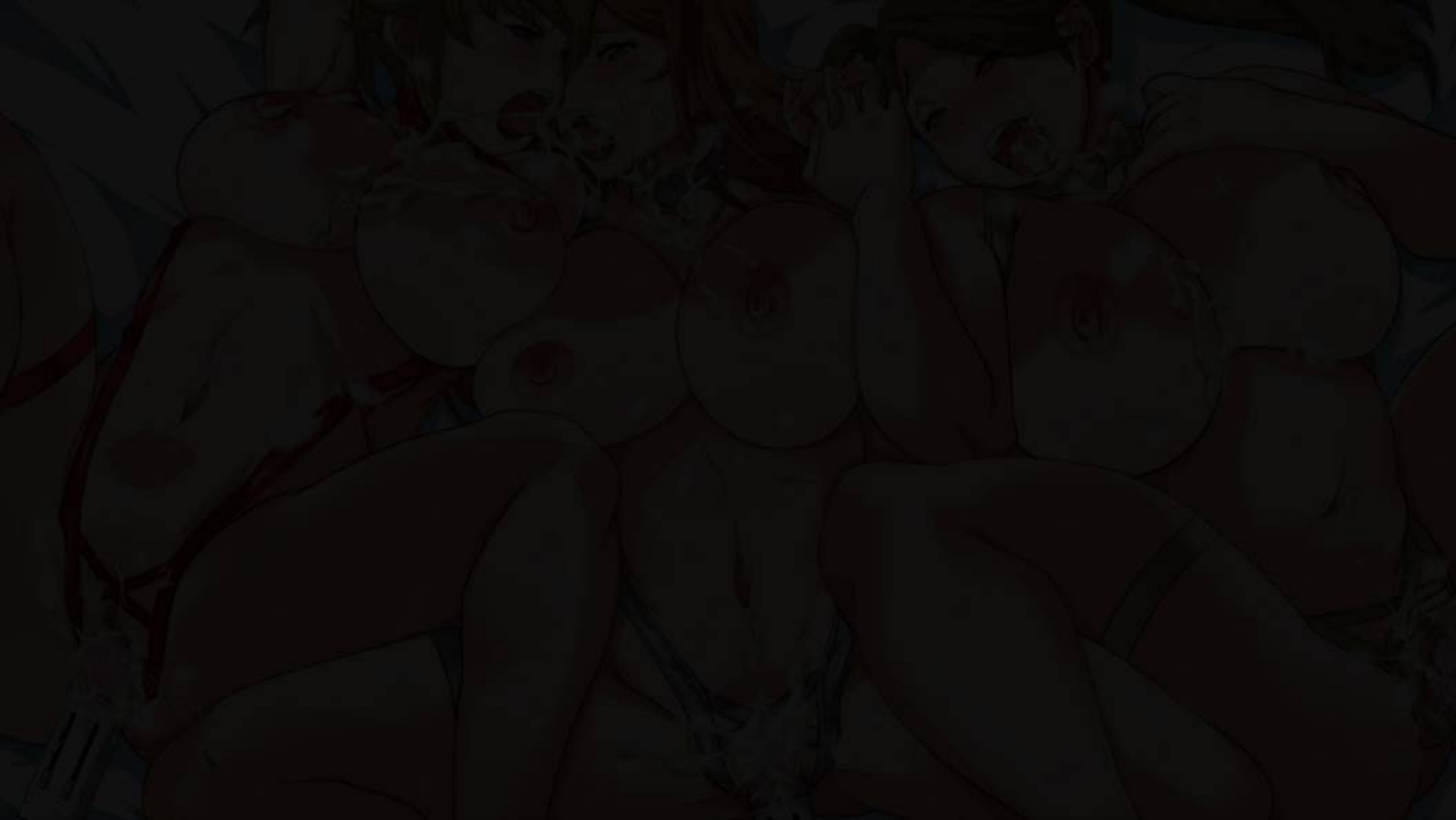


まったく最高だぜこのメス豚共は、  
今までみたいに面倒を避けるため、  
女共の腹がデカくなる前に  
おさらばしちゃもったいない。

こいつら程レベルの高いのが揃うのは稀だから、  
ガチでカ○ルコの家から金を引っ張って、  
飽きるまでどこかに囲って遊ぶ価値はありそうだな。

3人とも腹ボテにして楽しんで、  
産ませて母乳ブレイってのもいいな。  
あー考えるだけでワクワクするぜ――







模型部

— 5 —



模型部

「——おい！ お前！ 何ぼーっとしてんだ！」

「え？」

「え？」じゃねえよ！

おいおい お前FGカ○ダム組むのに

どんだけかかってんだよ！

まだ足しかできてね！じゃねえか！

この落ちこぼれが！」

# 模型部

「すみません！ すみません！」

どうやらあれこれ妄想していたら手が止まっていたようだ。

数ヶ月前この学校に転校してきた当初

カワイイ女部長のいるガ○ブラバトル部に入部しようとしたものの、ケンカの強そうな赤毛のチビと凄腕ビルダーらしいメガネにビビって、もう一人目星をつけていた前髪はつつん美人のいる模型部に入部したのだが、彼女は部長と付き合っていてラブラブっぷりを見せ付けられただけだった。

## 模型部

しかし俺は怒られるのが怖くて辞めると言い出すこともできず、作りたくもないガ○ブラを作らされている。

もっと早く転校してきてフ○子先輩一人きりのバトル部に入っていれば――  
バトル部によく顔を出すミ○イ先輩やカ○ルコさんに  
声をかけることができたなら――

くそっ！カ○キめ！くそっ！くそっ！くそっ！くそっ！

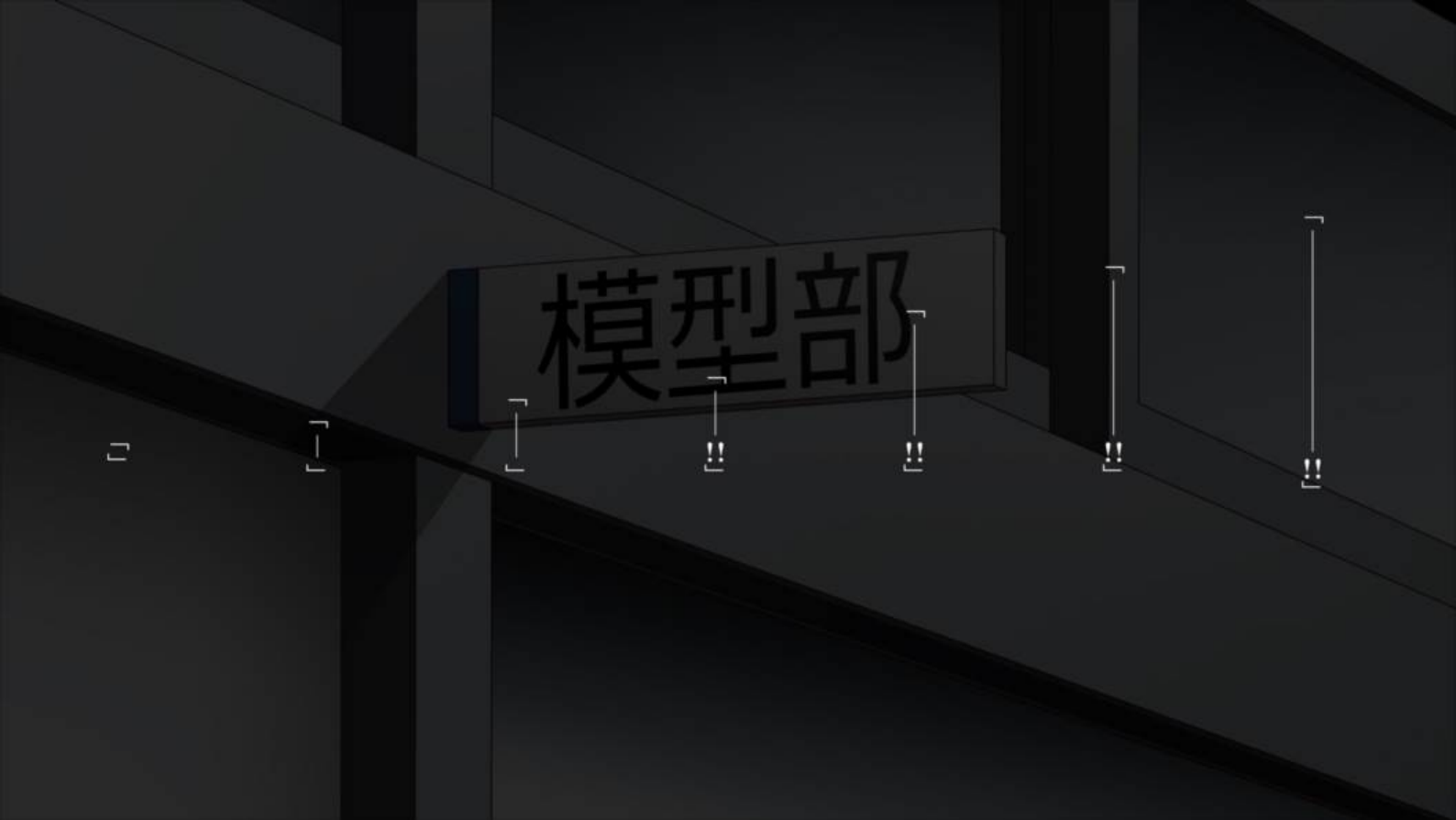
「また手が止まってんぞ！  
やる気あんのかためえ！ ころ！」

「びっ！ す すみませんっ！！」

「だからお前はアホなのだあーっ！！」

模型部

「びっ！！」



おわり